



【査読あり】

# 家事育児の意味づけと家事育児についての知識、 情報共有、相談先の有無との関係性 ——「対人援助学」と「学習学」の考え方を援用した検討<sup>1)</sup>——

滑 田 明 暢

(静岡大学大学教育センター)

Meaning making to performing family work and childcare: Knowledge, information sharing and having a supportive person in performing family work and childcare

NAMEDA Akinobu

(Shizuoka University Education Development Center)

The purpose of this study was to describe the ways of meaning making to family work and childcare, and to examine the relationship between each way of meaning making and knowledge of the ways of, information sharing in, and having a supportive person in performing family work and childcare. We conducted an online questionnaire survey and obtained responses from 517 married people with children (265 women and 252 men) living in central Japan. A hierarchical cluster analysis using ward method was conducted, in which the responses to the question asking about the meaning making of family work and childcare were used as variables. As a result, we extracted five typological groups of meaning making to family work and childcare. These groups were those who made sense of family work and childcare as something they were good at, those who made sense of family work and childcare as something they were bad at, those who made sense of family work and childcare as a necessary part of life, those who made sense of family work and childcare as something that gave them a sense of fulfillment, and those who made sense of family work and childcare in other ways. The overall trend was that those who gave positive connotations tended to be more knowledgeable about family work and childcare, more likely to share information with their spouse, and having a supportive person in performing family work and childcare.

本研究の目的は、人々の家事育児への意味づけ方を描き出すとともに、「対人援助学」と「学習学」の考え方を援用して、家事育児への意味づけ方と家事育児の知識、情報共有および相談先の有無との関係性を検討することである。オンライン質問紙調査を実施し、日本の都心部に居住する子どもをもつ既婚者 517 名（女性 265 名、男性 252 名）の回答を得た。家事育児への意味づけを尋ねた設問の回答を変数として投入した階層的クラスター分析（Ward 法）を行った。その結果、家事育児への意味づけ方の 5 つの類型グループを抽出した。それらのグループはそれぞれ、家事育児を「得意・楽しい」もの、「疲れる・苦手」なもの、「生活に必要である・疲れる」もの、「充実感が得られる・自分にとって意味のある」ものとして意味づけているグループと、その他の意味づけ方をしているグループであった。全体の傾向として、肯定的な意味づけをしているグループにおいては、家事育児の知識がもたれており、情報共有が行われており、相談先もあるという傾向が見出された。

**Key Words** : Family work and childcare, Meaning making, Knowledge, Information sharing,  
Having a supportive person

キーワード：家事育児、意味づけ、家事育児方法の知識、情報共有、相談先の有無

1) 本研究は、JSPS 科研費 15K16176 の助成を受けたものです。

## はじめに

望月 (2011) は、「当事者が他者の助けを借りながら自らや環境をより良く変えていける、主体的に行動する中で自ら成長していける人 (望月, 2011; p.1)」を「アクティブ・ラーナー (積極的学習者)」として定義し、「個人が絶えず『アクティブ・ラーナー』であり続けることのできる支援や社会関係を構築するための方法論、技法、哲学を探求 (望月, 2011; p.1)」する学範を「学習学」とした。「学習学」は、「対人援助学」の展開としての学範として位置づけられる。「対人援助学」は、当事者 (被援助者) が、自己決定に基づいて行動の選択肢を拡大することを対人援助の目標 (望月, 2010) とする学範である。本論文は、その「対人援助学」と「学習学」の考え方を援用して、家庭内の家事育児の遂行の文脈における研究課題の検討を試みるものである。

### 1. 問題と目的

#### 1.1 現代社会における家事分担の現状と学術的研究

統計情報を見ると、現代の日本社会では、女性と男性の家事育児の遂行量に違いがあることが示されている。例えば、社会生活基本調査 (総務省, 2016) の結果を見てみると、6歳未満の子どもをもつ夫婦の1日あたりの平均育児家事関連時間は、女性においては約7時間であるのに対し、男性においては約1時間であることが示されている。

女性と男性で家事育児時間に差がある現状は以前から続いている状況であり、そのなかで学術的関心もたれてきたのが、父親である男性の家事育児参加の規定因である。時間的余裕があれば家事育児に参加すると考える時間的余裕仮説、妻がより資源や勢力をもっているときに家事育児参加すると考える相対的資源仮説、「男性は仕事、女性は家庭」という考えを支持しない場合に家事育児参加すると考えるジェンダー・イデオロギー仮説が主な仮説として検討されてきた (不破・筒井, 2010; 石井クンツ, 2009; 中川, 2010)。男性の就労時間や通勤時間が短いほど家事育児に参加している (加藤・石井クンツ・牧野・土谷, 1998; 永井, 2001) という結果が示され

ていることから、3つの仮説のなかでも時間的余裕仮説が有力であると考えられている (石井クンツ, 2013)。

男性の家事育児参加の規定因に注目した研究の他には、家事育児を行うなかでの公平感に焦点を当てた研究がある。家事育児の遂行における公平感に焦点を当てた研究は、例えば家事育児も仕事も担っている女性はその状況を不公平と感じない場合がある (Baxter, 2000)、といったように、一見量的に不公平に見える家事育児分担を不公平と感じない心理があることに注目されたことから、研究が進められてきたと考えることができる。その心理の代表的な説明の一つに、女性の公正感に注目した分配的公正の枠組み (Thompson, 1991) がある。その枠組みにおいては、価値づけ (結果の価値) (outcome values)、比較参照 (comparison references)、正当化 (justifications) がなされることによって、一見量的に不公平な家事育児分担においても不公平さを感じないことが示されている。具体的には、自分が家事育児を担うことで家族関係が良くなると思える等、自分が家事を担うことによって起きる結果に価値を置く場合や、自分と同じような状況にいる女性の家事育児分担と比較する場合、そして、自分の稼得が多くないから家事育児を多く遂行するのは当然と思えるように、現状を正当化することができる場合に量的不公平さを感じないという心理的仕組みがその枠組みによって示されている。この枠組みによって提案された心理的仕組みは、これまでに複数の研究によって検証と確認がなされてきた (Blair and Johnson, 1992; Coltrane, 2000; Gager, 1998; Hawkins, Marshall, and Meiners, 1995; Kluwer, Heesink and Van de Vliert, 2002; Mikula, Schoebi, Jagoditsc, and Macher, 2009; 滑田, 2011)。

#### 1.2 家事育児の意味づけへの着目へ

現在に至るまでの家事育児に関する研究の文脈においては、家事育児分担における家事育児の規定因を理解しようとする研究と家事育児をするなかでの公平感を理解しようとする研究が多く蓄積されてきた (石井クンツ, 2013; 滑田, 2011)。つまり、家事育児分担における夫婦それぞれの遂行量を規定する

要因あるいは家事育児分担に対する公平感の心理メカニズムに着目し、公平な家事育児分担はどのように実現するのかと、家事育児分担を公平と感じるのはどのような状況なのか、を検討してきたといえる。量的に公平な家事育児分担の実現につながる知見を積み重ねること、そして、家事育児分担を公平と感じる状況を理解することは、人々が公平だと感じる家事育児分担の形とそれが実現される状況を知ることができるという意味で、家事育児に関わっている人の生活の質の向上に寄与するものであると考えられる。その一方で、公平な家事育児分担、あるいは家事育児分担についての公平感、家事育児の一側面であり、他にも家事育児を理解するうえで重要な側面は存在する。例えば、家事育児分担の公平性とは異なる観点からの意味づけである。家事育児分担の公平性以外の側面に焦点を当てて、人々の家事育児との関わり方の検討を行う余地があると考えられる。

そもそも、家事育児に関わっている人々は、自分自身が遂行している家事育児のことをどのように捉えているのだろうか。竹信(2013)が指摘するように、その重要性に関して家事育児には相反する評価が存在すると考えられる。そして、生活をするために必要な仕事であり、日々同じことを繰り返して行う(Coltrane, 2000)側面があることから、疲れる、といった否定的な評価がなされることがある一方で、楽しい、といった肯定的な評価がなされることがあることも想定することができる。あるいは、否定的な評価と肯定的な評価のいずれも混在する形で評価される場合があることも想定される。家事育児分担に注目した研究の流れから考えても、家事育児をどのように捉えているかによって、同じ家事育児の遂行量であってもその意味合いが変わってくる可能性があることから、個々人の家事育児への意味づけについての現状やその傾向、それに関わる力動や諸側面を理解しておくことは必要である。しかしながら、家事育児の意味づけに関する諸側面を実証的に検討した研究は、まだ多くない現状である。片づけ行為の意味(橋本, 2016)や、子育て経験の意味づけ(徳田, 2004)、出産と育児の体験が人生にもたらす意味(鄭・谷口, 2020)等、家事育児に関する行為や経験の意

味づけについての研究は積み重ねられつつある状況ではあるが、十分な数の研究があるとはいえない。

育児の経験の意味づけを検討した研究(鄭・谷口, 2020; 徳田, 2004)では、育児は肯定的に意味づけられる場合もあれば否定的に意味づけられる場合もあり、両面価値的な側面があるものとして報告されている。その一方で、これらの研究(鄭・谷口, 2020; 徳田, 2004)は女性による育児への意味づけが研究の対象となっており、男性の育児への意味づけや、家事についての意味づけは研究の対象に含まれていない。本研究は、研究の対象を育児だけでなく家事にも拡大し、女性と男性による家事育児への肯定的な意味づけや否定的意味づけ、両価の意味づけのあり様を明らかにすることをめざす。

家事育児の意味づけのあり様を検討するうえでは、「対人援助学」の考え方を援用し、家事育児の意味づけへの理解を深める糸口とする。「対人援助学」では、対人援助の目標として「当事者(被援助者)の自己決定に基づく行動の選択肢の拡大」(望月, 2011; p.1)が設定されてきた。その実践の例として、就労支援の文脈においては、業務の環境設定を変えることによって、業務に支障の出る行動が減少し、当事者は業務を自立遂行することができるようになった取り組みの例が挙げられる(太田・稲生・松田・望月, 2008; 中鹿・望月, 2010; 中鹿・尾西・小島・土田・望月, 2019)。この「対人援助学」の考え方を援用すると、人々が家事育児へ関わることにしても、家事育児遂行者の自己決定による行動の選択肢の拡大がなされることが、その遂行者の生活の質の向上にとって重要なものであると想定される。そのため本研究では、家事育児のそれぞれを遂行できるようになることを行動の選択肢の拡大と位置づけて、当事者が家事育児を遂行できる、ことを後押しする側面に着目して検討を進める。

家事育児の遂行における行動の選択肢の拡大、つまり本研究においては家事育児を遂行することができること、を促すものの一つは、家事育児に関する知識であると考えられる。家事育児の方法を知っていなければ、家事育児を遂行することは当事者にとって困難なものとなることが想定される。家事育児の知識は、これまでも育児の参加促進(阻害)

要因として検討はなされており、父親への質問紙調査をおこなった研究の結果では、仕事が忙しいために育児の時間がとれない等の時間的余裕に関する質問項目に比べるとその回答数は少ないものの、一定数の回答者は、育児に関する知識が不足していることを育児参加の阻害要因として捉えていた（柳原，2007）。このことから、家事育児の知識をもっていることは、男性の家事育児ができることを後押しするものであると想定される。

「対人援助学」では、当事者が他者の助けを借りながら自分で必要な力を獲得していくことができるといった、他立的自律が実現することも目標として設定されている（望月，2011）。そのため本研究では、家事育児に関する他者の助けにも注目する。家事育児の遂行において、他者の助けの一つは、家事育児を共に遂行している人との情報の共有であると考えられることができる。たとえ自分が家事育児の方法を知らなくても、家事育児を遂行するための情報が得られていれば、家事育児を自分で行えるようになる可能性が出てくると考えられるからである。また、他者の助けのもう一つの側面として、相談先があるかどうかは挙げられる。家事育児を遂行するなかで困難や問題に直面した際、その解決を図る方法の一つとして、他者に相談をして助けを得ることが挙げられる。父親である男性に対する配偶者からのソーシャルサポートは、父親である男性の平日の育児参加時間を間接的に高める結果が報告されており（多喜代・北宮，2019）、情報提供を含めて、配偶者からの助けが家事育児を遂行できることに関わっていることが想定される。

### 1-3. 本研究の目的

本研究の目的の一つは、家事育児遂行者が家事育児をどのように意味づけているかを探索的に理解することである。家事育児を遂行している人々の、家事育児への肯定的な意味づけや否定的意味づけ、両価の意味づけのあり様の理解を試みる。また、本研究の目的の二つめは、家事育児の知識、家事育児の情報共有、家事育児についての相談先の有無と、家事育児への意味づけ方との関係を検討することである。家事育児の知識と家事育児の情報共有、家事育

児についての相談先の有無は、「対人援助学」の目標である行動の選択肢の拡大や他立的自律に関わると考えられる側面である。

望月（2011）は、「対人援助学」の展開としての「学習学」を、個人が他者の助けを借りながら主体的に行動をして成長していける環境を自分で設定することができる環境設定づくりの方法や考え方を探求する学範として定義している。この「学習学」の考え方を援用すると、他者の助けを借りながら家事育児を遂行することができる状況にある人が、望月のいう「当事者が他者の助けを借りながら自らや環境をより良く変えていける、主体的に行動する中で自ら成長していける人（望月，2011; p.1）」であり、「アクティブ・ラーナー（積極的学習者）（望月，2011; p.1）」に近い存在であると捉えることができる。他者の助けを借りることができている状況にある人が、どのように家事育児を意味づけ、家事を遂行しているのかを検討することが本研究の大枠としての趣旨である。

## 2. 方法

### 2-1. 調査の手続きと参加回答者

家事育児への意味づけ方は、一様ではないことが想定される一方で、人々に共通する傾向もあることが想定される。個別に多様な意味づけ方の特徴を捉えながらも、人々に共通する傾向を明らかにするために、本研究では質問紙調査を行った。質問紙調査は、回答者の募集を調査会社に委託する形で2019年2月に実施した。調査会社の登録者のうち20歳から59歳の日本の一都三県に居住する子どもをもつ既婚者を対象に調査の回答を依頼し、回答数が500を超えた時点で調査への回答を締め切った。結果として、日本の一都三県に居住する子どもをもつ既婚者517名（女性265名、男性252名）の回答を得た。平均年齢は、女性41.4、男性46.5であり、年齢の範囲は女性23-59、男性21-59であった。子どもの数の平均は、女性1.73で、男性は1.79であった。女性では31%、男性では38%の人たちが18歳以上の子どもをもっており、未就学児（0-2歳と3-5歳）の子どもをもつ親の割合は、女性では24%（0-2歳）

と23%（3-5歳）、男性では12%（0-2歳）と13%（3-5歳）であった。また、女性回答者の約半数は、専業主婦であった。その他の記述情報は表1に示す。

## 2-2. 調査内容と質問項目

質問紙調査は、家事・育児と就労の調査として実施した。性別と年齢、居住地域等、調査会社にて尋ねる項目を除き、質問紙調査では、自由記述の設問も含めて27問（全43項目）の質問が尋ねられた。それらの質問項目のうち、本研究では、次に示す項目を分析の対象にした。具体的には、日常的に行っている家事育児、家事育児への意味づけ（家事育児をどのようなものとして捉えているか）、家事育児の知識（家のなかで行われている家事育児の方法を知っているかどうか、家事育児の全体像が見えているかどうか）、家事育児の情報共有（配偶者と家事育児に関する方法や状況等を互いに伝え合っているかどうか）、家事育児についての相談先（相談することができる人がいるかどうか、相談することができる人は誰か）についての項目である。本研究に用いていない項目も含めて、質問紙調査の全質問項目を表2に示す。

日常的に行っている家事育児に関しては、参加者が日常的に行っている家事育児の内容を尋ねた（表2の問10を参照）。回答者は、回答選択肢の中から、日常的に行っている家事育児を複数選択可能な形式にて回答した。回答の選択肢は、朝食の準備、お弁当、昼食の準備、夕食の準備、食事の片づけ、食材や日用品の買い物、洗濯物を干す、洗濯物をたたむ、居間の掃除、トイレや風呂、洗面台の掃除、ゴミ出し、庭の手入れ、クルマやバイク、自転車の掃除と維持管理、雪かき、介護に関わる家事、子どものおむつ交換やトイレの世話、子どもをお風呂に入れる、子どもの身支度の世話、子どもの食事の世話、子どもの寝かしつけ、子どもと遊ぶ、子どもの送り迎え、子どもの宿題をみる、子どもの学校や習い事の行事、活動への参加、子どもの相談にのる、その他、であった。参加回答者の家事育児遂行状況は、表3に示した。女性と男性の回答を見比べると、全般的に多くの選択肢において、遂行しているとする回答の割合は女性の方が大きい傾向があった。

家事育児への意味づけに関しては、回答者が家事育児をどのようなものとして捉えているかを尋ねた（表2の問12を参照）。具体的には、「『家事・育児』

表1 参加回答者の記述情報

	女性	N=265	男性	N=252
平均年齢（年齢幅）	41.4	(23-59)	46.5	(21-59)
子どもの平均数	1.73		1.79	
子どもの年齢 度数と割合 ※				
0-2歳	64	24%	31	12%
3-5歳	61	23%	34	13%
6-8歳	48	18%	51	20%
9-11歳	36	14%	45	18%
12-14歳	42	16%	51	20%
15-17歳	39	15%	54	21%
18歳以上	82	31%	97	38%
就労状況 度数と割合				
自営業（家族従業員含む）	5	2%	8	3%
自由業	5	2%	6	2%
法人・団体の役員	6	2%	18	7%
常雇いの従業員	27	10%	202	80%
派遣・契約・嘱託従業員	10	4%	8	3%
パート・アルバイト	66	25%	5	2%
専業主婦／専業主夫	141	53%	0	0%
学生	0	0%	0	0%
無職	4	2%	2	1%
その他	1	0%	3	1%

※（該当する年齢層の子どもがいる参加者の割合 各年齢層の子どもの度数 / 回答者数）

表2 質問紙調査に用いた質問項目とその回答方法

質問番号	質問内容	回答選択肢	回答方法
1	あなたのお子さんの人数について、あてはまるもの1つをご選択ください。	・1人 ・2人 ・3人 ・4人以上	単一回答
2	あなたのお子さんの年齢について、あてはまるものすべてをご選択ください（例えば、子どもが二人で、6歳と9歳であれば、「6~8歳」と「9~11歳」を選択ください。7歳と8歳であれば、「6~8歳」のみを選択ください。）	・0~2歳 ・3~5歳 ・6~8歳 ・9~11歳 ・12~14歳 ・15~17歳 ・18歳以上	複数回答
3	現在、いっしょにお住まいの方すべてをご選択ください。	・ひとり暮らし ・配偶者（配偶者） ・未婚の子ども ・自分の親 ・配偶者の親 ・既婚の子ども ・既婚の子どもの配偶者 ・孫（既婚の子どもの子） ・その他の親族 ・その他（ ）	複数回答
4	あなたの就労状況について、あてはまるもの1つをご選択ください。	・自営業（家族従業者を含む） ・自由業 ・法人・団体の役員 ・常雇いの従業者 ・派遣・契約・嘱託従業者 ・パート、アルバイト ・専業主婦／専業主夫 ・学生 ・無職 ・その他（ ）	単一回答
5	あなたの配偶者の就労状況について、あてはまるもの1つをご選択ください。	・自営業（家族従業者を含む） ・自由業 ・法人・団体の役員 ・常雇いの従業者 ・派遣・契約・嘱託従業者 ・パート、アルバイト ・専業主婦／専業主夫 ・学生 ・無職 ・その他（ ）	単一回答
6	あなたの出勤時間（家を出る時間）と帰宅時間を教えてください。典型的な一日を思い出し、回答ください。在宅勤務の場合は出勤ではなく業務の開始と終了時間をお答えください。	出勤時間（ ）時頃（半角数字で1~24を入力） 帰宅時間（ ）時頃（半角数字で1~24を入力）	自由記述
7	あなたの配偶者の出勤時間（家を出る時間）と帰宅時間を教えてください。典型的な一日を思い出し、回答ください。在宅勤務の場合は出勤ではなく業務の開始と終了時間をお答えください。	出勤時間（ ）時頃（半角数字で1~24を入力） 帰宅時間（ ）時頃（半角数字で1~24を入力）	自由記述
8	あなたは、家全体の「家計への貢献（生活費を稼ぐこと）」のなかで、どれくらいの割合を担当していますか？家全体の総量を10としたときの割合をお答えください。就労されていない場合には、「まったく担当していない」をご選択ください。	・まったく担当していない ・1割 ・2割 ・3割 ・4割 ・5割 ・6割 ・7割 ・8割 ・9割 ・10割（すべて担当している）	単一回答
9	あなたの趣味や好きなことについて教えてください。あなたはいま、趣味や自分の好きなことに使える時間はありますか？（お答えは1つ）	・ある ・どちらかといえば、ある ・どちらかといえば、ない ・ない ・特に好きなことややりたいことはない	単一回答
10	あなたは日常的に、どのような「家事・育児」を行っていますか。下記のうち、あてはまるものすべてをご選択ください。	・朝食の準備 ・お弁当、昼食の準備 ・夕食の準備 ・食事の片づけ ・食材や日用品の買い物 ・洗濯物を干す ・洗濯物をたたむ ・居間の掃除 ・トイレや風呂、洗面台の掃除 ・ゴミ出し ・庭の手入れ ・クルマやバイク、自転車の掃除と維持管理 ・雪かき ・介護に関わる家事 ・子どものおむつ交換やトイレの世話 ・子どもをお風呂に入れる ・子どもの身支度の世話 ・子どもの食事の世話 ・子どもの寝かしつけ ・子どもと遊ぶ ・子どもの送り迎え ・子どもの宿題をみる ・子どもの学校や習い事の行事、活動への参加 ・子どもの相談にのる ・その他（ ）	複数回答
11	あなたの配偶者は日常的に、どのような「家事・育児」を行っていますか。下記のうち、あてはまるものすべてをご選択ください。	・朝食の準備 ・お弁当、昼食の準備 ・夕食の準備 ・食事の片づけ ・食材や日用品の買い物 ・洗濯物を干す ・洗濯物をたたむ ・居間の掃除 ・トイレや風呂、洗面台の掃除 ・ゴミ出し ・庭の手入れ ・クルマやバイク、自転車の掃除と維持管理 ・雪かき ・介護に関わる家事 ・子どものおむつ交換やトイレの世話 ・子どもをお風呂に入れる ・子どもの身支度の世話 ・子どもの食事の世話 ・子どもの寝かしつけ ・子どもと遊ぶ ・子どもの送り迎え ・子どもの宿題をみる ・子どもの学校や習い事の行事、活動への参加 ・子どもの相談にのる ・その他（ ）	複数回答
12	「家事・育児」はあなたにとってどういったものですか？あてはまるものすべてをご選択ください。	・楽しい ・ストレスフル ・やりがいを感じる ・疲れる ・苦手 ・得意なもの ・私にとって意味のあるもの ・生活するために必要なもの ・充実感が得られるもの ・家庭への貢献 ・やって当たり前のもの ・その他（ ）	複数回答
13	あなたは、家全体の「家事・育児」のなかで、どれくらいの割合を担当していますか？家全体の総量を10としたときの割合をお答えください。（お答えは1つ）	・まったく担当していない ・1割 ・2割 ・3割 ・4割 ・5割 ・6割 ・7割 ・8割 ・9割 ・10割（すべて担当している）	単一回答
14-1	あなたは一日のうち、どれくらいの時間「家事・育児」を行っていますか。平日のなかの典型的な一日を思い出し、あてはまるもの1つを選択ください。	・0.5時間未満 ・1時間程度 ・2時間程度 ・3時間程度 ・4時間程度 ・5時間程度 ・6時間程度 ・7時間程度 ・8時間程度 ・9時間程度 ・10時間程度以上	単一回答

14-2	あなたの配偶者は一日のうち、どのくらいの時間「家事・育児」を行っていると思いますか。平日のなかの典型的な一日を思い出し、あてはまるもの1つを選択ください。	・0.5時間未満 ・1時間程度 ・2時間程度 ・3時間程度 ・4時間程度 ・5時間程度 ・6時間程度 ・7時間程度 ・8時間程度 ・9時間程度 ・10時間程度以上	単一回答
15	あなたは、「家事・育児」にもっと参加してもらえよう配偶者に求めたことがありますか。(お答えは1つ)	・ある(参加を求めたことがある) ・ない(参加を求めたことはない)	単一回答
16	配偶者に参加を求めた結果、配偶者の「家事・育児」に変化はありましたか？(お答えは1つ)	・変化はあった ・変化はなかった	単一回答
17	さしつかえなければ、変化の内容や期間など、どのような変化があったかを教えてください。(例、・・・のとき、・・・を行うようになった。それは現在まで続いている。)変化がなかった場合には、変化がなかったときの状況を教えてください。(例、・・・のとき、・・・を頼りたけれど、・・・に変化はなかった。)		自由記述
18	あなたは、「家事・育児」にもっと参加してもらえよう配偶者から求められたことがありますか。(お答えは1つ)	・ある(参加を求められたことがある) ・ない(参加を求められたことはない)	単一回答
19	配偶者から参加を求められた結果、あなたの「家事・育児」に変化はありましたか？(お答えは1つ)	・変化はあった ・変化はなかった	単一回答
20	さしつかえなければ、変化の内容や期間など、どのような変化があったかを教えてください。(例、・・・のとき、・・・を行うようになった。それは現在まで続いている。)変化がなかった場合には、変化がなかったときの状況を教えてください。(例、・・・のとき、・・・を頼まれたけれど、・・・は変えなかった。) 各質問項目について、あなたの考えや状況に最も近いものそれぞれ1つをご選択ください。		自由記述
21-1	私と配偶者との「家事・育児」の分担では、それぞれ担当することは決まっている。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
21-2	日頃は配偶者が行っている「家事・育児」であっても、必要となれば私はその「家事・育児」を行う。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
21-3	私は、配偶者の「家事・育児」の仕方について改善点をよく指摘する。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
21-4	私の「家事・育児」の仕方について、配偶者から改善点をよく指摘される。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
21-5	私は、私の家のなかで行われている「家事・育児」の方法を知っている。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
21-6	私は、私の家のなかで行われている「家事・育児」の全体像が見えている。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
21-7	私は、配偶者に言われるより先に「家事・育児」に取り組む。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
21-8	配偶者は、私が行うよりも先に、家の中の「家事・育児」に取り組んでいる。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
22-1	何らかの理由で私が家事育児をできないときにも、配偶者は現在私が行っている「家事・育児」を代わって行うことができる。(スキルや能力の面から考えた場合)	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
22-2	何らかの理由で私が家事育児をできないときにも、配偶者は現在私が行っている「家事・育児」を代わって行うことができる。(時間的余裕や職場環境から考えた場合)	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
23-1	何らかの理由で配偶者が家事育児をできないときにも、私は現在配偶者が行っている「家事・育児」を代わって行うことができる。(スキルや能力の面から考えた場合)	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
23-2	何らかの理由で配偶者が家事育児をできないときにも、私は現在配偶者が行っている「家事・育児」を代わって行うことができる。(時間的余裕や職場環境から考えた場合)	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
24-1	私と配偶者は、「家事・育児」に関する情報(方法や状況など)を互いに伝え合っている。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
24-2	私と配偶者は、状況が変わればその都度、「家事・育児」の仕方や分担について見直し、調整する機会をもっている。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
24-3	私が「家事・育児」の分担について不平を言っているとき、私の配偶者は私の言っていることをよく聞いてくれる。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
24-4	現在の「家事・育児」の分担は、二人でいっしょに決めたことだ。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
24-5	私の配偶者は、私がお互い解決方法を提案し合う。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
24-6	「家事・育児」の分担について何か問題があれば、私たちはお互い解決方法を提案し合う。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
24-7	私はときどき、私の行っている「家事・育児」が、配偶者に認められていないと感じることがある。	・そう思う ・どちらかといえば、そう思う ・どちらかといえば、そう思わない ・そう思わない	単一回答
25	あなたは、現在のあなたと配偶者との「家事・育児」の分担に満足していますか？	・満足している ・どちらかといえば、満足している ・どちらかといえば、満足していない ・満足していない	単一回答
26	「家事・育児」について、相談できる人はいますか？次のうち、あてはまる方すべてを選択ください。	・相談できる人はいない ・配偶者(配偶者) ・自分の親 ・配偶者の親 ・親戚 ・友人、知人 ・職場の同僚 ・病院や自治体などの担当者、相談窓口 ・その他( )	複数回答
27	さいごに、「家事・育児」について普段思っていることがあれば自由に記載ください。		自由記述

※本論文の研究の分析に用いた質問項目には、色を付けている。

表3 日常的に行っていると回答した参加回答者の数と割合（性別ごと）

家事育児の内容項目	女性	N=265	男性	N=252
1 朝食の準備	215	81%	41	16%
2 お弁当, 昼食の準備	188	71%	21	8%
3 夕食の準備	250	94%	58	23%
4 食事の片づけ	238	90%	136	54%
5 食材や日用品の買い物	249	94%	105	42%
6 洗濯物を干す	243	92%	91	36%
7 洗濯物をたたむ	238	90%	91	36%
8 居間の掃除	239	90%	84	33%
9 トイレや風呂, 洗面台の掃除	232	88%	126	50%
10 ゴミ出し	167	63%	156	62%
11 庭の手入れ	74	28%	49	19%
12 クルマやバイク, 自転車の掃除と維持管理	45	17%	113	45%
13 雪かき	51	19%	65	26%
14 介護に関わる家事	12	5%	3	1%
15 子どものおむつ交換やトイレの世話	95	36%	20	8%
16 子どもをお風呂に入れる	118	45%	56	22%
17 子どもの身支度の世話	142	54%	22	9%
18 子どもの食事の世話	159	60%	30	12%
19 子どもの寝かしつけ	119	45%	34	13%
20 子どもと遊ぶ	137	52%	92	37%
21 子どもの送り迎え	114	43%	48	19%
22 子どもの宿題をみる	87	33%	45	18%
23 子どもの学校や習い事の行事, 活動への参加	120	45%	38	15%
24 子どもの相談にのる	145	55%	66	26%
25 その他	1	0%	5	2%

はあなたにとってどういったものですか」と尋ねた。回答者は、回答選択肢の中から、当てはまるものを複数選択可能な形式にて回答した。回答の選択肢は、楽しい、ストレスフル、やりがいを感じる、疲れる、苦手、得意なもの、私にとって意味のあるもの、生活するために必要なもの、充実感が得られるもの、家庭への貢献、やって当たり前なもの、その他、であった。

家事育児の知識に関しては、家のなかで行われている家事育児の方法を知っているかどうか、家事育児の全体像が見えているかどうかを尋ねた（表2の間21-5と21-6を参照）。具体的には、「私は、私の家のなかで行われている『家事・育児』の方法を知っている」かどうか、「私は、私の家のなかで行われている『家事・育児』の全体像が見えている」かどうかを尋ねた。それぞれ4件法（1：そう思う、2：どちらかといえばそう思う、3：どちらかといえばそう思わない、4：そう思わない）で回答を求めた。回答結果を集計する際には、逆数処理を行った。そのため、本項目の回答結果は、数値が大きいほど、

家事育児の知識があると認識していることを示す。

家事育児の情報共有に関しては、配偶者と家事育児に関する方法や状況等を互いに伝え合っているかどうかを尋ねた（表2の間24-1を参照）。具体的には、「私と配偶者は、『家事・育児』に関する情報（方法や状況等）を互いに伝え合っている」かどうかを尋ねた。それぞれ4件法（1：そう思う、2：どちらかといえばそう思う、3：どちらかといえばそう思わない、4：そう思わない）で回答を求めた。回答結果を集計する際には、逆数処理を行った。そのため、本項目の回答結果は、数値が大きいほど、家事育児の情報共有を行っていると認識していることを示す。

家事育児についての相談先に関しては、相談することができる人がいるかどうか、相談することができる人は誰か、を尋ねた（表2の間26を参照）。具体的には、「『家事・育児』について、相談できる人はいますか。あてはまる方すべてをご選択ください」と尋ねた。回答者は、回答選択肢の中から相談することができる人を複数選択可能な形式にて回答し

た。回答の選択肢は、相談できる人はいない、配偶者（配偶者）、自分の親、配偶者の親、親戚、友人・知人、職場の同僚、病院や自治体等の担当者、相談窓口、その他、であった。

### 2-3. 倫理的配慮

本研究における質問紙調査は、回答者個人が特定される形で結果が公表されることはないこと、調査によって得られた結果は学術的目的に使用すること、本調査は回答者の自由意思によって参加の可否が決められること、が事前に調査回答者に伝えられたうえで実施された。

### 2-4. 分析方法

質問紙調査における回答をもとに、意味づけ方の多様さと人々に共通する傾向を捉える方法として、本研究では階層的クラスタ分析（Ward法）を用いた。家事育児への意味づけに関する回答を変数として投入した階層的クラスタ分析（Ward法）を行うことで、家事育児への意味づけ方のグルーピングを行い、家事育児への意味づけ方の類型グループを抽出した（結果は、表4に記載）。階層的クラスタ分析（Ward法）を行う際には、投入する各変数の回答得点は標準化して用いた。そして、クラスタ分析によって抽出した類型グループごとに、家事育児の知識（家のなかで行われている家事育児の方法を知っているかどうか、家事育児の全体像が見えているかどうか）、家事育児の情報共有（配偶者と家

事育児に関する方法や状況等を互いに伝え合っているかどうか）、家事育児についての相談先（相談することができる人があるかどうか、相談することができる人は誰か）の回答得点を確認した（結果は、表8に記載）。確認においては、各項目への回答の得点と、各項目の midpoint（1点～4点の4件法で尋ねていたなかでの midpoint となる 2.5点）を回答者全員の得点とした場合との比較を行う1サンプルの *t* 検定を行い、それぞれの項目において、回答は midpoint と比べて高い得点だったのか低い得点だったのか、同程度の得点だったのかを確認した。これにより、家事育児への意味づけ方と、家事育児を他者の助けを借りながら自分で行うこととの関係性を検討した。

## 3. 結果

家事育児をどのようなものとして捉えているかを尋ねた設問の回答を変数として投入した階層的クラスタ分析（Ward法）を行い、家事育児への意味づけ方の5つの類型グループを抽出した。抽出した類型グループごとに、投入した各変数の設問への回答数と回答割合を表4に示した。

抽出した各グループには、それぞれ1番目と2番目に回答数の多かった項目の表現をもとに名前を付けた。具体的には、1つ目のグループ（G1）には「得意・楽しい」と名前を付け、2つ目のグループ（G2）には「疲れる・苦手」と名前を付けた。3つ目のグループ（G3）には「生活に必要・疲れる」と名前を付け、

表4 家事育児への意味づけに関する項目の回答数と回答割合（抽出したグループごと）

	得意・楽しい グループ: G1 (N=24)		疲れる・苦手 グループ: G2 (N=111)		生活に必要・疲れる グループ: G3 (N=311)		充実・意味あり グループ: G4 (N=62)		その他 グループ: G5 (N=9)	
楽しい	16	67%	17	15%	84	27%	47	76%	1	11%
ストレスフル	5	21%	51	46%	0	0%	7	11%	2	22%
やりがいを感じる	12	50%	14	13%	58	19%	30	48%	1	11%
疲れる	8	33%	73	66%	129	41%	28	45%	3	33%
苦手	4	17%	72	65%	0	0%	2	3%	0	0%
得意なもの	24	100%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
私にとって意味のあるもの	13	54%	22	20%	60	19%	49	79%	1	11%
生活するために必要なもの	12	50%	43	39%	130	42%	39	63%	1	11%
充実感が得られるもの	9	38%	2	2%	0	0%	62	100%	1	11%
家庭への貢献	12	50%	30	27%	91	29%	37	60%	1	11%
やって当たり前のもの	14	58%	31	28%	114	37%	36	58%	2	22%
その他	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	9	100%

※表中、「グループ」を「G」と省略して表現している。

※各グループにおいて3割以上の回答があった項目を太字にて表現し、各グループで最も回答の多かった項目に下線を付している。

4つ目のグループ (G4) には「充実・意味あり」と名前を付けた。5つ目のグループ (G5) には「その他」と名前を付けたが、「その他」の回答には、頭の切り替え、苦行、対価が得られない労働、幸せなもの、誰もしないので代わりにがない、といったように多様な内容が含まれていたため、以降の分析では5つ目のグループ (G5) の回答を分析の対象に含めないことにした。

表4に記載された各グループの回答数と回答割合を参照しながらそれぞれのグループの特徴を見ていくと、「得意・楽しい」グループは、家事育児を得意なもの、楽しいものであると意味づけている回答者が1番目と2番目に多く、それと同時にやって当たり前なもの、私にとって意味のあるもの、といった他の意味づけ方も行っている回答者が多いグループであった。「疲れる・苦手」は、家事育児は疲れるもの、苦手なものとして意味づけている回答者が1番目と2番目に多く、ストレスフル、生活するために必要なもの、と意味づけている回答者も多いグループであった。「生活に必要・疲れるグループ」は、生活するために必要なもの、疲れるものとして家事育児を意味づけている回答者が1番目と2番目に多く、やって当たり前なもの、と意味づけている回答者も多いグループであった。「充実・意味あり」グループは、家事育児は自分にとって意味のあるもの、充実感をもたらすものであると意味づけている回答者が1番目と2番目に多く、その他には、楽しい、生活に必要なもの、といった他の意味づけ方を行って

いる回答者が多いグループであった。各グループに共通する傾向を見てみると、疲れる、生活するために必要なもの、とする回答は、「その他」グループを除いていずれのグループにおいても、3割以上の回答者が選択をしていた。回答者数が最も多かったグループは「生活に必要・疲れる」グループであり、次に多かったグループは「疲れる・苦手」グループであった。

本研究の質問紙調査においては、女性と男性では家事育児の遂行状況に違いがあると見て取れた。そのため、各グループの女性と男性の回答数の内訳がわかるように、抽出したグループごとの意味づけに関する回答を女性と男性に分けた集計も行った(表5を参照)。女性と男性に分けて集計を行っても、各グループともに概ね同様の特徴をもっていることが確認できたが、「生活に必要・疲れる」グループは、女性と男性で異なる特徴をもっていることが読み取れた。同グループの女性においては、疲れる、という意味づけをしている人の割合が半数を超えていた一方で、男性においては、家事育児を、疲れる、と意味づけている回答者の割合は3割に満たなかった。また、やりがいを感じる、と回答している人の割合は女性においては1割程度であるが、男性においては2割を超えていた。つまり、同じ「生活に必要・疲れる」グループのなかにおいても、女性と男性では、その意味づけの内容が異なっているという結果であった。女性にとっては、生活に必要なものとしての意味があることに加えて、疲れるのものであると

表5 家事育児への意味づけに関する項目の回答数と回答割合 (抽出したグループの女性男性ごと)

	得意・楽しい グループ:		疲れる・苦手 グループ:		生活に必要・疲れる グループ:		充実・意味あり グループ:		その他 グループ:											
	G1 女性 (N=12)	G1 男性 (N=12)	G2 女性 (N=66)	G2 男性 (N=45)	G3 女性 (N=150)	G3 男性 (N=161)	G4 女性 (N=34)	G4 男性 (N=28)	G5 女性 (N=3)	G5 男性 (N=6)										
楽しい	9	75%	7	58%	9	14%	8	18%	37	25%	47	29%	27	79%	20	71%	1	33%	0	0%
ストレスフル	3	25%	2	17%	35	53%	16	36%	0	0%	0	0%	4	12%	3	11%	0	0%	2	33%
やりがいを感じる	7	58%	5	42%	7	11%	7	16%	18	12%	40	25%	14	41%	16	57%	1	33%	0	0%
疲れる	6	50%	2	17%	49	74%	24	53%	82	55%	47	29%	16	47%	12	43%	1	33%	2	33%
苦手	2	17%	2	17%	41	62%	31	69%	0	0%	0	0%	2	6%	0	0%	0	0%	0	0%
得意なもの	12	100%	12	100%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%
私にとって意味のあるもの	8	67%	5	42%	14	21%	8	18%	33	22%	27	17%	24	71%	25	89%	1	33%	0	0%
生活するために必要なもの	7	58%	5	42%	32	48%	11	24%	73	49%	57	35%	21	62%	18	64%	0	0%	1	17%
充実感が得られるもの	5	42%	4	33%	1	2%	1	2%	0	0%	0	0%	34	100%	28	100%	1	33%	0	0%
家庭への貢献	7	58%	5	42%	18	27%	12	27%	43	29%	48	30%	17	50%	20	71%	1	33%	0	0%
やって当たり前なもの	8	67%	6	50%	22	33%	9	20%	58	39%	56	35%	21	62%	15	54%	2	67%	0	0%
その他	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	3	100%	6	100%

※表中、「グループ」を「G」と省略して表現している。

※各グループにおいて3割以上の回答があった項目を太字にて表現し、各グループで最も回答の多かった項目に下線を付している。

いう意味づけがなされている一方で、男性においては、疲れるものとして意味づけされることが女性の場合よりも少なく、やりがいを感じるものとして意味づけされることが女性よりも多い傾向があったことが読み取れた。

抽出したグループごとの記述統計を表6に示した。就業状況が女性と男性では傾向が異なるため、別々に集計を行った。女性と男性の集計結果を見ると、共通する傾向として、「得意・楽しい」グループと「充実・意味あり」グループに比べると、「疲れる・苦手」グループと「生活に必要・疲れる」グループにおいて18歳以上の子どもがいると回答している人の割合が数値上は大きいことが見てとれた。

各グループの家事育児の遂行状況を表7に示した。家事育児の遂行状況に関しても、女性と男性において傾向が異なるため、別々に集計を行った。特徴的な点を挙げるとすれば、「得意・楽しい」グループと「充実・意味あり」グループの男性において、家事育児の各項目内容を日常的に行っているとする回答割合が、他の2つのグループの男性の回答割合と比べると数値上は全般的に大きいことが見てとれた。

各グループの家事育児の知識、家事育児に関する情報共有の平均値と標準偏差、1サンプルのt検定

の結果を表8に示した。1サンプルのt検定は、各変数項目の midpoint（1点～4点の4件法で尋ねていたなかでの midpoint となる 2.5 点）を回答者全員の得点とした場合との比較を行った。家事育児の遂行状況が女性と男性で異なる傾向であったため、グループごとの各項目の平均値と標準偏差の算出、1サンプルのt検定も、女性と男性それぞれで行った。

まず、女性回答者における各項目の平均得点および1サンプルのt検定の結果を類型グループごとに見ていくと、家事育児の知識に関しては、いずれのグループにおいても、 midpoint となる 2.5 点よりも高い得点が示されており、その差は統計的に有意であった（検定結果と効果量は表8）。つまり、各グループともに、回答者は家事育児の方法を知っており、かつ、家事育児の全体像についても知っている状況であった。1サンプルのt検定の効果量を見ると、どのグループにおいても効果量は大きかったが、そのなかでも「得意・楽しい」グループと「充実・意味あり」グループの効果量の値は、「疲れる・苦手」グループと「生活に必要・疲れる」グループと比べて大きかった。配偶者との情報共有に関しては、「得意・楽しい」グループと「充実・意味あり」グループにおいてのみ、 midpoint と比較する 1 サンプルの t 検定によって検討された差は統計的に有意であり、中

表6 参加回答者の記述情報（各グループの女性男性ごと）

	得意・楽しいグループ:		疲れる・苦手グループ:		生活に必要・疲れるグループ:		充実・意味ありグループ:	
	G1 女性 (N=12)	G1 男性 (N=12)	G2 女性 (N=66)	G2 男性 (N=45)	G3 女性 (N=150)	G3 男性 (N=161)	G4 女性 (N=34)	G4 男性 (N=28)
平均年齢（年齢幅）	38.5 (23-55)	43.4 (28-58)	40.6 (23-59)	46.5 (21-59)	41.9 (25-59)	47.3 (22-59)	41.4 (25-59)	42.8 (31-54)
子どもの平均数	1.50	1.92	1.70	1.76	1.74	1.76	1.88	1.89
子どもの年齢 度数と割合 ※								
0~2 歳	3 25%	3 25%	12 18%	6 13%	39 26%	15 9%	9 26%	7 25%
3~5 歳	3 25%	3 25%	22 33%	4 9%	27 18%	19 12%	9 26%	8 29%
6~8 歳	5 42%	5 42%	17 26%	6 13%	21 14%	31 19%	5 15%	8 29%
9~11 歳	0 0%	5 42%	8 12%	6 13%	24 16%	25 16%	4 12%	8 29%
12~14 歳	1 8%	3 25%	6 9%	10 22%	27 18%	28 17%	7 21%	8 29%
15~17 歳	1 8%	2 17%	7 11%	8 18%	22 15%	37 23%	9 26%	6 21%
18 歳以上	2 17%	3 25%	21 32%	18 40%	49 33%	69 43%	9 26%	3 11%
就業状況 度数と割合								
自営業（家族従業者含む）	0 0%	0 0%	2 3%	3 7%	3 2%	4 2%	0 0%	1 4%
自由業	1 8%	1 8%	0 0%	0 0%	1 1%	3 2%	3 11%	1 4%
法人・団体の役員	0 0%	1 8%	4 6%	4 9%	1 1%	9 6%	1 4%	4 14%
常雇いの従業員	1 8%	6 50%	9 14%	35 78%	14 9%	136 84%	3 11%	20 71%
派遣・契約・嘱託従業員	1 8%	1 8%	1 2%	0 0%	6 4%	7 4%	0 0%	0 0%
パート・アルバイト	1 8%	1 8%	15 23%	2 4%	41 27%	2 1%	9 32%	0 0%
専業主婦	8 67%	0 0%	35 53%	0 0%	80 53%	0 0%	18 64%	0 0%
学生	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%
無職	0 0%	1 8%	0 0%	0 0%	4 3%	0 0%	0 0%	1 4%
その他	0 0%	1 8%	0 0%	1 2%	0 0%	0 0%	0 0%	1 4%

※（該当する年齢層の子どもがいる参加者の割合 各年齢層の子どもの度数 / 回答者数）

表7 家事育児の各項目内容を日常的に行っているとした回答の数と割合(各グループの女性男性ごと)

家事育児の内容項目	得意・楽しい グループ:		疲れる・苦手 グループ:		生活に必要・疲れる グループ:		充実・意味あり グループ:									
	G1 女性 (N=12)	G1 男性 (N=12)	G2 女性 (N=66)	G2 男性 (N=45)	G3 女性 (N=150)	G3 男性 (N=161)	G4 女性 (N=34)	G4 男性 (N=28)								
	1 朝食の準備	9	75%	3	25%	52	79%	6	13%	119	79%	27	17%	32	94%	4
2 お弁当, 昼食の準備	9	75%	4	33%	49	74%	3	7%	97	65%	8	5%	31	91%	4	14%
3 夕食の準備	12	100%	5	42%	63	95%	7	16%	138	92%	35	22%	34	100%	9	32%
4 食事の片づけ	9	75%	9	75%	61	92%	24	53%	132	88%	83	52%	33	97%	18	64%
5 食材や日用品の買い物	11	92%	9	75%	64	97%	17	38%	137	91%	59	37%	34	100%	18	64%
6 洗濯物を干す	11	92%	6	50%	58	88%	16	36%	137	91%	52	32%	34	100%	15	54%
7 洗濯物をたたむ	10	83%	5	42%	60	91%	17	38%	132	88%	53	33%	33	97%	15	54%
8 居間の掃除	11	92%	6	50%	58	88%	14	31%	134	89%	53	33%	33	97%	10	36%
9 トイレや風呂, 洗面台の掃除	10	83%	7	58%	58	88%	24	53%	128	85%	76	47%	33	97%	19	68%
10 ゴミ出し	6	50%	8	67%	46	70%	29	64%	92	61%	94	58%	21	62%	23	82%
11 庭の手入れ	6	50%	3	25%	18	27%	9	20%	35	23%	34	21%	13	38%	3	11%
12 クルマやバイク, 自転車の掃除と維持管理	3	25%	4	33%	8	12%	17	38%	27	18%	77	48%	6	18%	14	50%
13 雪かき	4	33%	6	50%	12	18%	10	22%	26	17%	38	24%	8	24%	11	39%
14 介護に関わる家事	0	0%	1	8%	4	6%	0	0%	5	3%	1	1%	2	6%	1	4%
15 子どものおむつ交換やトイレの世話	5	42%	1	8%	27	41%	4	9%	48	32%	8	5%	14	41%	7	25%
16 子どもをお風呂に入れる	7	58%	4	33%	36	55%	9	20%	60	40%	29	18%	14	41%	14	50%
17 子どもの身支度の世話	7	58%	2	17%	42	64%	4	9%	72	48%	11	7%	19	56%	5	18%
18 子どもの食事の世話	8	67%	3	25%	44	67%	3	7%	83	55%	18	11%	22	65%	6	21%
19 子どもの寝かしつけ	7	58%	2	17%	32	48%	4	9%	62	41%	20	12%	17	50%	8	29%
20 子どもと遊ぶ	8	67%	7	58%	37	56%	14	31%	72	48%	52	32%	19	56%	19	68%
21 子どもの送り迎え	6	50%	3	25%	33	50%	8	18%	57	38%	32	20%	16	47%	5	18%
22 子どもの宿題をみる	4	33%	3	25%	22	33%	6	13%	49	33%	26	16%	11	32%	10	36%
23 子どもの学校や習い事の行事, 活動への参加	5	42%	4	33%	32	48%	3	7%	63	42%	22	14%	19	56%	8	29%
24 子どもの相談にのる	5	42%	5	42%	31	47%	11	24%	84	56%	39	24%	24	71%	9	32%
25 その他	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	1	1%	2	1%	0	0%	0	0%

点となる2.5点よりも高い得点が示されていた。つまり、配偶者との情報共有がなされていると認識されているという結果であった。

次に、男性回答者における各項目の平均得点および1サンプルの $t$ 検定の結果を類型グループごとに見ていくと、家事育児に関する知識のなかでも家事育児の方法の知識に関しては、「得意・楽しい」グループと「生活に必要・疲れる」グループ、「充実・意味あり」グループにおいて、中点と比較する1サンプルの $t$ 検定は統計的に有意であり、中点となる2.5点よりも高い得点が示されていた(検定結果と効果量は表8)。つまり、それら3グループにおいては、回答者は家事育児の方法を知っている、という状況であった。また、家事育児の全体像の知識に関しては、「得意・楽しい」グループと「生活に必要・疲れる」グループにおいて、中点と比較する1サンプルの $t$ 検定は統計的に有意であり、中点となる2.5点よりも高い得点が示されていた。つまり、それら2グループにおいては、家事育児の全体像を知っているという結果であった。配偶者との情報共有に関しては、「得意・楽しい」グループと「生活に必要・疲れる」グループ、「充実・意味あり」グループに

おいて、中点と比較する1サンプルの $t$ 検定によって検討された差は統計的に有意であり、それらの得点は中点となる2.5点よりも高い得点であったことから、それら3グループにおいては配偶者との情報共有がなされているという結果であった。配偶者との情報共有については、「得意・楽しい」グループと「充実・意味あり」グループにおいて効果量が大きいという結果であった。

グループごとの家事育児の相談先についての回答結果を、表9に示した。表9では、それぞれの相談先に対して、家事育児について相談できると回答した人の数と割合を示した。まず、女性の回答者では、各グループともに概ね相談できる人がいる状況であることが確認された。各グループともに、相談できる人はいない、と回答した人の割合は大きくても2割程度までとなっており、それぞれのグループの8割程度の人は、いずれかの人に相談ができる、と認識していたことが確認された。相談先として、多くの回答があったのが配偶者と自分の親であり、友人・知人を相談先として挙げている回答も多いことが読み取れた。配偶者を相談できる人として回答した回答者の割合は、「得意・楽しい」グループと「充実・

表 8 家事育児の知識、家事育児に関する情報共有の各項目の平均値と標準偏差、1 サンプルの t 検定の結果 (各グループの女性男性ごと)

	女性				男性			
	得意・楽しいグループ: G1 (N=12)	疲れる・苦手グループ: G2 (N=66)	生活に必要・疲れるグループ: G3 (N=150)	充実・意味ありグループ: G4 (N=34)	得意・楽しいグループ: G1 (N=12)	疲れる・苦手グループ: G2 (N=45)	生活に必要・疲れるグループ: G3 (N=161)	充実・意味ありグループ: G4 (N=28)
家事育児の知識								
家事育児の方法を知っている	3.50** (0.67)	3.24** (0.91)	3.31** (0.87)	3.56** (0.61)	3.25* (0.97)	2.62 (0.72)	2.80** (0.69)	2.89** (0.63)
家事育児の全体像を知っている	3.58** (0.67)	3.32** (0.86)	3.26** (0.92)	3.53** (0.66)	3.17* (1.03)	2.62 (0.81)	2.73** (0.71)	2.79 (0.79)
家事育児の情報共有								
方法と状況の伝え合い	3.25** (0.62)	2.58 (0.95)	2.52 (0.90)	3.18** (0.80)	3.33** (0.65)	2.49 (0.79)	2.76** (0.75)	3.18** (0.55)

\* $p<0.05$ , \*\* $p<0.01$

※括弧内の数字が標準偏差を示している

表 9 家事育児についての相談先 (各グループの女性男性ごと)

	女性				男性			
	得意・楽しいグループ: G1 (N=12)	疲れる・苦手グループ: G2 (N=66)	生活に必要・疲れるグループ: G3 (N=150)	充実・意味ありグループ: G4 (N=34)	得意・楽しいグループ: G1 (N=12)	疲れる・苦手グループ: G2 (N=45)	生活に必要・疲れるグループ: G3 (N=161)	充実・意味ありグループ: G4 (N=28)
配偶者	10	83%	29	44%	67	45%	24	71%
自分の親	8	67%	34	52%	68	45%	24	71%
配偶者の親	0	0%	5	8%	11	7%	10	29%
親戚	1	8%	7	11%	2	1%	2	6%
友人・知人	7	58%	26	39%	58	39%	24	71%
職場の同僚	0	0%	4	6%	3	2%	5	11%
病院や自治体などの担当者・相談窓口	1	8%	2	3%	5	3%	0	0%
その他	0	0%	2	3%	1	1%	0	0%
相談できる人はいない	1	8%	9	14%	32	21%	1	3%

※それぞれの相談先に対して、家事育児について相談できると回答した人の数と割合を示した

※比率は、回答数 / グループの人数

表 10 意味づけ類型グループと家事育児遂行の度合い、家事育児の知識、  
配偶者との情報共有、相談先の有無との関係性

	家事育児遂行の度合い	家事育児の知識	配偶者との情報共有	相談先
得意・楽しいグループ: 女性 G1 (N=12)	多	有	有	有
充実・意味ありグループ: 女性 G4 (N=34)	多	有	有	有
生活に必要・疲れるグループ: 女性 G3 (N=150)	多	有	非有	有
疲れる・苦手グループ: 女性 G2 (N=66)	多	有	非有	有
得意・楽しいグループ: 男性 G1 (N=12)	中程度	有	有	有
充実・意味ありグループ: 男性 G4 (N=28)	中程度	有	有	有
生活に必要・疲れるグループ: 男性 G3 (N=161)	少	有	有	有
疲れる・苦手グループ: 男性 G2 (N=45)	少	非有	非有	概ね有

※家事遂行の度合いは、「夕食の準備」を遂行しているとする回答者割合が0-30%を「少」、31-60%を「中程度」、61-100%を「多」とした。  
家事育児の知識は、「家事育児の方法」における *t* 検定の結果をもとにした。  
配偶者との情報共有は、「配偶者との情報共有」における *t* 検定の結果をもとにした。  
相談先は、「相談できる人はいない」とする回答者割合が、0-30%を「有」、31-60%を「概ね有」、61-100%を「非有」とした。

意味あり」グループにおいて7割を超えていた。

男性の回答者では、「得意・楽しい」グループと「生活に必要・疲れる」グループ、「充実・意味あり」グループの各グループにおいてはそれぞれのグループの8割程度の人が、いずれかの人に相談できると認識しており、「疲れる・苦手」グループにおいては、7割程度であった。相談先として、多くの回答があったのが配偶者と自分の親であった。配偶者を相談できる人として回答した回答者の割合は、「得意・楽しい」グループと「生活に必要・疲れる」グループ、「充実・意味あり」グループにおいて7割を超えていた。

#### 4. 考察

##### 4-1. 家事育児への意味づけ方の類型

本研究では、質問紙調査における家事育児の意味づけに関する回答を変数として投入した階層的クラスタ分析（Ward法）を実施することにより、家事育児の意味づけ方の4グループを抽出した。4つ

のグループのうち、「得意・楽しい」グループと「充実・意味あり」グループは、家事育児を楽しいと捉えている回答者の割合も多く、家事育児を肯定的に意味づけているグループであるといえる。その一方で、「疲れる・苦手」グループと「生活に必要・疲れる」グループは、家事育児を疲れるものと捉えている回答者の割合も多く、家事育児を否定的なものとして意味づけているグループであると考えられる。

4つのグループのいずれにおいても、疲れる、生活するために必要なもの、とする回答選択肢を3割以上の回答者が選択していたことから、家事育児を、疲れる、生活するために必要なもの、とする意味づけは、家事育児を遂行する人々にとってより一般的な意味づけ方であると捉えることができる。この観点をふまえると、「生活に必要・疲れる」グループは、生活するために必要、とする意味づけと、疲れる、とする意味づけをする回答が、グループ内で1番目と2番目に多いグループであり、またグループに含まれている回答者の数も多いグループであったた

め、家事育児を遂行するなかで、生活に必要、疲れるという意味づけ方は、より多くの人々が行う意味づけ方であることが考えられる。

その一方で、「得意・楽しい」グループと「充実・意味あり」グループ、あるいは、「疲れる・苦手」グループのように、より肯定的あるいは否定的なものとして意味づけている色合いが強いグループもあった。先行研究でも（鄭・谷口, 2020; 徳田, 2004）、肯定、否定のいずれかのみが表出されている場合と、両面的な側面が表出されている場合が示されていた。本研究においては、両面的な意味づけがなされるなかでも、肯定的側面と否定的側面のいずれかの色合いのある意味づけ方がなされる様相があることが確認された。

それぞれの類型グループにおける家事育児の遂行状況を見てみると、まず、女性の各グループと男性の各グループを比べると、全体的に女性の各グループにおいてより多くの家事育児を行っている傾向が見てとれた。そして、女性男性ごとに各類型グループの家事育児の遂行状況を見てみると、女性の各グループにおいて大きな傾向の差は見られなかったが、男性の各グループにおいては、「疲れる・苦手」グループと「生活に必要・疲れる」グループの両グループに比べると、「得意・楽しい」グループと「充実・意味あり」グループにおいて全般的に家事育児を遂行していると回答している割合が大きかった。前者の2グループは、否定的な意味づけがなされているグループであり、後者の2グループは、肯定的な意味づけがなされている2グループである。このことから、特に男性においては、家事育児を肯定的に意味づけているからこそより多くの家事を行う、あるいは、家事をより多く行うからこそ肯定的な意味づけをする機会にも出会うことになる、といったように、家事育児遂行状況との関係によって意味づけが形成されている可能性が示唆された。

#### 4-2. 家事育児への意味づけ方の類型と家事育児に関する知識、情報共有、相談先との関係性

それぞれの類型グループにおける家事育児に関する知識や家事育児の情報共有の状況については、その結果に女性と男性で共通していた点と相違してい

た点があった。まず、女性と男性で共通していた点は、「得意・楽しい」グループと「充実・意味あり」グループという家事育児を肯定的なものとして捉えている2グループが、家事育児の方法の知識と配偶者との情報共有において回答の平均得点も大きく、1サンプルの $t$ 検定の効果量も大きかった点である。女性男性ともに、家事育児を肯定的に捉えている人たちは、家事育児の方法の知識をもっており、家事育児の方法と状況についての情報共有を配偶者とも行っている状況があることが示されたといえる。

次に、相違していた点を挙げると、女性においてはすべてのグループにおいて、家事育児に関する知識をもっているという回答傾向が示されていたが、男性においては「疲れる・苦手」グループにおいて、家事育児の知識をもっているという回答傾向は示されなかった。また、家事育児の方法や状況の情報共有を配偶者で行っているかに関しては、女性においては、家事育児を肯定的に捉えている2グループにおいて配偶者との情報共有が行われているという回答傾向が示されたが、男性グループにおいては、肯定的に捉えている2グループに加えて「生活に必要・疲れる」グループにおいても情報共有がなされているという結果であった。

これらの相違点のうち、前者の相違点である家事育児の知識についての回答傾向の違いに関しては、家事育児に日常的に接している度合いが影響していた可能性がある。本研究の回答者においても、女性の回答者は、一部を除いてほとんどの家事の内容に対して6割以上の方が遂行していると回答していた一方で、男性の回答者の6割以上が遂行していると回答している家事内容の数は少なかった。このことから、日常的に家事育児を行っている人にとっては、家事育児の知識は家事育児の意味づけ方とは関係がない一方で、家事育児に日常的に接していない人にとっては、家事育児の知識があるかどうか家事育児の意味づけ方と関係があるという可能性が示唆される。

後者の相違点である家事育児の方法や状況の情報共有を配偶者で行っているかどうかに関する回答傾向の相違点については、「生活に必要・疲れる」グループにおける女性と男性の回答傾向の違いによっても

たらされた可能性がある。「生活に必要・疲れる」グループでは、女性においては、疲れる、とする回答をした人が半数を超えていた一方で、男性においては3割ほどであった。また、やりがいを感じる、と意味づけをしていた回答者も、女性においては1割ほどであり、男性においては2割を超えていた。そのため、同じ「生活に必要・疲れる」グループであったとしても、男性の「生活に必要・疲れる」グループは、家事育児をより肯定的に意味づけている色合いをもつグループであった可能性がある。仮に、男性の「生活に必要・疲れる」グループが家事育児を比較的肯定的に意味づけている色合いがあるグループであるとしたら、すでに共通点として述べた回答傾向と同じく、女性男性ともに、配偶者との情報共有がなされていることと肯定的な意味づけをすることには関係があることが示されることになる。

これまで述べてきた家事育児への意味づけ方と家事育児の知識、配偶者との情報共有との関係性および相談先の有無との関係性をまとめると、表10のように整理されると考えられる。まず、家事育児の知識に関しては、家事育児を日常的に行っている度合いが少ない場合に、その知識の有無が、男性の否定的意味づけのなかでも否定的色合いのある意味づけと肯定的色合いのある意味づけを分ける形で関係している可能性が示唆される。そして、配偶者との情報共有に関しては、女性においても男性においても、否定的意味づけと肯定的意味づけ、あるいは否定的意味づけのなかでも否定的色合いのある意味づけと肯定的色合いのある意味づけを分ける形で関係している可能性が示唆される。相談先に関しては、すべてのグループにおいていずれかの相談先があることが確認されたが、家事育児の方法や配偶者との情報共有がなされておらず、家事育児との関わりが少ない場合に、相談先がないとする回答が相対的には多くなることが考えられる。

#### 4-3. 「対人援助学」「学習学」の考え方をもとにした考察

「対人援助学」や「学習学」においては、当事者の自己決定に基づく行動の選択肢の拡大と他立的自律の考え方が重要視され、行動的な生活の質の向上、

つまり好ましい結果で維持される行動の選択肢の拡大がめざされてきた(望月, 2010)。この「対人援助学」や「学習学」の考え方を援用すると、家事育児の遂行に関する研究においても、その遂行状況を変えることによって好ましい結果が得られるとともに行動の選択肢の拡大がなされる状況がめざされることが考えられる。家事育児の遂行における行動の選択肢の拡大の一つは、家事育児を自分の意思決定のもとでできるようになり、好ましい結果とともにそれが維持されることであると想定される。言い換えれば、当事者が好ましい結果とともに家事育児を遂行することができる状態であることが想定される。家事育児を遂行することができる状態を後押しするものとして、本研究では、家事育児の知識に注目した。そして、家事育児の遂行における他立的自律の環境設定の一つとして、家事育児の情報共有と相談先の有無にも注目した。

本研究の結果では、家事育児に肯定的意味づけをしている人たちにおいて、家事育児の知識がもたれていることと、配偶者との情報共有がなされていること、そして家事育児のことを誰かに相談できるという認識がもたれていることの傾向が確認された。このことから、「対人援助学」や「学習学」の考え方において想定されている、好ましい結果とともに行動の選択肢の拡大がなされる状況が、家事育児の遂行においても確認されたと考えることができる。望月(2011)は「学習学」における「アクティブ・ラーナー(積極的学習者)」を、援助者と被援助者の区別なく、他者の助けを借りながら主体的に自分自身とその環境に働きかけて行動の選択肢を拡大していく人として位置づけている。この位置づけ方をもとに考えると、本研究の結果で示されたような、好ましい結果(肯定的意味づけ)とともに、他者の助けのもとに家事育児を自分で行うために必要な環境設定(知識があることと情報共有できる他者がいること、相談できる人がいること)があるなかで家事育児を遂行していた人々は、「学習学」における「アクティブ・ラーナー(積極的学習者)」に近い人々であったことが考えられる。

その一方で、家事育児の知識があり、情報共有ができる他者がおり、相談できる人がいるなかで家事

育児を肯定的に意味づけている人々が、家事育児遂行における「アクティブ・ラーナー (積極的学習者)」像であると断定するのは早計である。本研究の結果においても、家事育児の知識がある場合に必ず肯定的な意味づけがなされているというわけではなかった。そして、相談先に関しても、相談先がある場合に必ずしも肯定的な意味づけがなされているというわけではなかった。具体的にどのような場面や文脈で、何がそれぞれの家事遂行者の行動の選択肢の拡大をもたらすのかを、今後も継続的に検討する必要がある。その他には、本研究では検討を行わなかったが、時間的な余裕がないために家事育児に日常的に取り組めず、結果として知識や情報共有、相談、肯定的意味づけが行えない、という可能性も考えられる。また、肯定的に意味づけられなかったのは、多くの家事育児を担当して、疲れていた、という可能性がある。たくさんの家事育児を担当することによって、結果として肯定的意味づけができていなかったということであれば、肯定的意味づけができていないからといって「アクティブ・ラーナー (積極的学習者)」ではない、と言い切ることは妥当ではないだろう。引き続き、多角的な観点から検討を行う必要があると考えられる。

さいごに一つ、本研究の限界を述べておきたい。本研究の限界は、当事者が主体的に自分自身とその環境に働きかける、という側面を本研究では重点的に描くことができなかったことである。当事者が主体的に環境に働きかける側面の一つには、配偶者に依頼をして家事育児の遂行方法に関する調整を試みることが挙げられる。すでに関連する研究はいくつか行われているため (Mannino and Deutsch, 2007; 中川, 2010; 末盛, 2013), それらの知見をまとめて、家事を遂行するという文脈において個人が絶えず「アクティブ・ラーナー (積極的学習者)」であり続けることのできる社会関係とはどのようなものであるかを考察する研究として、今後検討が進められることが期待される。

## 引用文献

- Baxter, J. (2000). The joys and justice of housework. *Sociology*, 34, 609-631.
- Blair, S.L. & Johnson, M.P. (1992). Wives' perception of the fairness of the division of household labour: The intersection of housework and ideology. *Journal of Marriage and Family*, 54, 570-581.
- 鄭香苗・谷口初美 (2020). 初めての出産、育児をしている女性の生きられた体験 日本助産学会誌, 34 (1), 38-49.
- Coltrane, S. (2000). Research on household labor: Modeling and measuring the social embeddedness of routine family work. *Journal of Marriage and family*, 62 (4), 1208-1233.
- 不破麻紀子・筒井淳也 (2010). 家事分担に対する不公平感の国際比較分析 家族社会学研究, 22 (1), 52-63.
- Gager, C.T. (1998). The role of valued outcomes, justifications, and comparison referents in perceptions of fairness among dual-earner couples. *Journal of Family Issues*, 19, 622-648.
- 橋本嘉代 (2016). 現代社会における「片づけ」という行為の意味: 片づけコンサルタント・近藤麻理恵の「人生を変える」片づけ術に注目して 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, 11, 67-75.
- Hawkins, A. J., Marshall, C. M. & Meiners, K. M. (1995). Exploring wives' sense of fairness about family work: An initial test of the distributive justice framework. *Journal of Family issues*, 16, 693-721.
- 石井クンツ昌子 (2009). 父親の役割と子育て参加—その現状と規定要因, 家庭への影響について季刊家計経済研究, 81, 16-23.
- 石井クンツ昌子 (2013). 「育メン」現象の社会学. ミネルヴァ書房.
- 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子 (1998). 父親の育児参加を規定する要因—どのような条件が父親の育児参加を進めるのか 家庭教育研究所紀要, 20, 38-47.
- Kluwer, E.S., Heesink, J.A.M. & Van de Vliert, E. (2002). The division of labour across the transition to parenthood: A justice perspective. *Journal of Marriage and Family*, 64, 930-943.
- Mannino, C. A., & Deutsch, F. M. (2007). Changing the division of household labor: A negotiated process between partners. *Sex Roles*, 56 (5), 309-324.
- Mikula, G., Schoebi, D., Jagoditsch, S. & Macher, S. (2009). Roots and correlates of perceived injustice in division of family work. *Personal relationships*, 16, 553-574.
- 望月昭 (2010). 「助ける」を継続的に実現するための対人援助学 望月昭・サトウタツヤ・中村正・武藤崇 (編) 対人援助学の可能性—「助ける科学」の創造と展開 (pp.9-31) 福村出版.
- 望月昭 (2011). 対人援助学の展開としての学習学の創造 対人援助学を超え, 主体的な学習を可能にする「学習学」

- の創成へ R-GIRO Quarterly Report vol. 06 [Summer 2011].  
 ([http://www.ritsumei.ac.jp/rgiro/common/pdf/public/issues/QR06/R-GIRO\\_QR06-01.pdf](http://www.ritsumei.ac.jp/rgiro/common/pdf/public/issues/QR06/R-GIRO_QR06-01.pdf)) (最終閲覧 2022 年 2 月 13 日))
- 永井暁子 (2001). 父親の家事育児遂行の要因と子どもの家事参加への影響 季刊家計経済研究, 49, 44-53.
- 中川まり (2009). 共働き夫婦における妻の働きかけと夫の育児・家事参加 人間文化創成科学論叢, 12, 305-313.
- 中川まり (2010). 子育て期における妻の家庭責任意識と夫の育児・家事参加 家族社会学研究, 22 (2), 201-212.
- 中鹿直樹・望月昭 (2010). 課題分析を使った指導の記録を就労支援に活用する 立命館人間科学研究, 20, 53-64.
- 中鹿直樹・尾西洋平・小島遼・土田菜穂・望月昭 (2019). 障害のある生徒を対象とした大学内模擬喫茶店舗における職場実習 対人援助学研究, 8, 14-23.
- 滑田明暢 (2011). 家族内役割分担に関わる適格性概念の整理と検討—対人関係場面における公正判断の理解にむけて— 法と心理, 11, 58-67.
- 太田隆士・稲生ゆみ子・松田光一郎・望月昭 (2008). 総合支援学校高等部生徒の職場体験実習における機能分析とセルフ・マネジメント行動の獲得に向けて 立命館人間科学研究, 17, 107-115.
- 総務省 (2016). 平成 28 年社会生活基本調査 総務省統計局.
- 末盛慶 (2013). 性別役割分担をめぐる夫婦間交渉—クレーム行為に関する実証分析— 日本福祉大学社会福祉論集, 128, 35-50.
- 竹信三恵子 (2013). 家事労働ハラスメント—生きづらさの根にあるもの 岩波新書.
- 多喜代健吾・北宮千秋 (2019). 父親の育児参加への育児参加要因およびソーシャルサポートの影響 日本看護研究学会雑誌, 42 (4), 763-773.
- Thompson, L. (1991). Family Work: Women's sense of fairness. *Journal of Family Issues*, 12, 181-196.
- 徳田治子 (2004). ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ: 生涯発達の視点から 発達心理学研究, 15 (1), 13-26.
- 柳原真知子 (2007). 父親の育児参加の実態 天使大学紀要, 7, 47-56.